

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

神戸市立図書館開館100周年記念号
第 69 号 平成23年11月20日
編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



開館当時の図書館

開館百周年

神戸市立図書館が明治四十四（一九一一年）年十一月十日に開館してから、百周年を迎えた。

開館時の建物は、初代の神戸市庁舎を改装した建物で、相生町一丁目にあった。大正八年の『神戸市新圖實地踏査』で見ると、神戸駅の北東すぐの場所であり、図書館の西側に商業会議所、南側の栄町通を挟んで眼と鼻の先（東側）に鈴木商店本店、交差点を挟んでその斜め向いに神戸新聞社があった。

鈴木商店は、大正期に隆盛を極めた大商社（財閥）であり、城山三郎の『鼠』にも描かれたように、米騒動の最中の大正七年八月十二日、湊川公園から押し寄せた群衆による焼討ちで、三階建の本店が焼失した。

午後八時半から十一時頃の出来事で、当時図書館は午後十時（四月～九月）まで開館しており、幸いにして類焼は免れたが、その時館内にいた利用者や職員は、窓外の歴史的事件をどのような思いで見たのだろうか。

その後、市立図書館は大正十年、現在の大倉山公園に新築・移転し、「大倉山の図書館」と呼ばれて、市民に親しまれることになる。

今号は、神戸市立図書館開館百周年記念号として、開館当時の神戸に
関連する本をご紹介します。（絵葉書は、明治四十五年図書館開館式記念のものです。）

明治時代発行の神戸案内

神戸みやげ名勝案内 高梨東神堂編・発行

市制十六年目の明治三十八年に発行された観光案内で、十一ヶ所の名所がカラーページを含めて紹介されている。

布引の滝・諏訪山・清盛塚は現在も当時と変わらぬ姿の一方、電気鉄道・湊川遊園は姿を消した。米利堅波止場・神戸停車場・和田ヶ崎は様変わりし、生田神社・湊川神社・能福寺大仏はそれぞれ再建され、百年余りの間の社会の変化が感じられる。



図書館全景と閲覧室の光景

神戸港 田中鎮彦（神戸港編纂事務所）

この本は明治三十八年に出版されたもので、元神戸市長鳴瀧幸恭が序文を寄せている。内容は、神戸の沿革史をはじめ、神戸港に船籍を持つ船舶の一覧、貿易関係の統計、各種業者の名簿、名勝古跡案内など様々な資料が盛り込まれ、当時の神戸の状況がよくわかる。中でも、旧居留地の外国商館の営業案内は、神戸における外国人の様子を知る上で重要な資料といえるだろう。

神戸の花 農美重由（辻岩雄）

神戸の花、といっても植物の本ではない。明治三十年に書かれた神戸の案内書、いわばガイドブックである。当時、神戸で関西府県連合共進会、第二回大日本水産博覧会などのイベントが続いていたため、その観光客を自当てに書かれたという。

神戸の歴史、地理をはじめ、官公庁、名所旧跡、居留地、飲食店、宿、遊郭などの紹介、人力車の料金も詳細に載っている。百十年以上前の神戸へ行けそうな気にさせられる本である。

豪商神兵湊の魁 垣貫與祐著・発行
復刻版 神戸史学会複製

本書は、明治十五年に出版された神戸と兵庫の店を絵入りで案内したもの。当時の神戸とは、今の元町や神戸駅あたりを指す。

神戸では、お茶と並んでコーヒーが販売され、饅頭とともにカステラが並ぶ。椅子やテーブルを売る店、西洋雑貨や靴、こうもり傘の店などハイカラな店が多い。

一方、兵庫では、昔ながらの店が並び、海辺には造船所や船具を扱う店が見える。名所旧跡や食事所も紹介され、神戸のガイドブックともなっている。

写真・絵葉書でみる明治の神戸

明治の神戸懐古寫眞聚 市政100周年記念 中右瑛（交友出版）

明治の頃、外国人向けのお土産品として作られた蒔絵アルバムの中から、神戸の写真を選び冊子にまとめたものである。

海や山から望む美しい神戸市街や港、洋館の立ち並ぶ海岸通り、にぎやかな元町通りや生田神社界限、市中を走る鉄道線路やそれを跨ぐ相生橋など、手彩色を施した写真からは往古の姿がしのばれる。

明治・大正神戸のおもかげ集 写真、版画に見る明治・大正の神戸 荒尾親成（中外書房）

郷土史家であり、神戸市立南蛮美術館（現神戸市立博物館）館長を務めた荒尾親成が、自ら収集していた明治・大正時代の神戸の写真や版画に説明をつけてまとめた一冊。

布引の滝、居留地に数多く建ち始めた洋風ホテル、和田岬の水族館、飛行機揺籃期の飛行大会（飛行ショー）、婦人専用電車、現在の王子動物園あたりの関西学院チャペル（現神戸文学館）、チンドン屋、東遊園地のクリケットクラブといった、今となっては話として聞くだけになってしまったさまざまな「おもかげ」がユーモアあふれる説明文で紹介されている。



閲覧室の光景と事務室

生誕百年・神戸ゆかりの人物

神戸―我が幼き日の… 田宮虎彦

小松益喜（中外書房）

明治四十四年八月五日、東京に生まれた田宮虎彦は、今年生誕百年を迎えた。「私にはふるさとが二つある」という田宮が、そのひとつである神戸への思いを込めたエッセー集。

船員だった父の関係で、下関、姫路と移り、大正二年五月から昭和五年の春まで神戸で暮らした。

「開港都市神戸を、私たち少年は誇りに思っていた。旧居留地から海岸通りへつづくビル街。華やかな元町通り。華僑の店が軒をつらねている南京町。」一人の少年が見た大正から昭和初めにかけての神戸が描かれている。なお、本書前半は、小松益喜の画文集となっている。



図書の整理と閲覧室の光景

花森安治の仕事 酒井寛（朝日新聞社）

花森安治は神戸に生まれ、小学校では田宮虎彦と同級、神戸三中（現長田高校）では一年以上級に淀川長治、同学年に宮崎辰雄がいた。高校浪人の一年間、大倉山の市立図書館に通い「図書館からは港がよく見え、窓があいていると、汽笛がきこえた。」と記している。

「暮らしの手帖」創刊から死去まで編集長を務めた生涯を関係者への取材を中心にとりまとめ、昭和六十二年、朝日新聞に連載。翌年に加筆発行されたのが本書である。

私の履歴書―神戸の都市経営 宮崎辰雄（日経事業出版社）

本書は、第十三代市長宮崎辰雄の出生から昭和六十年までの半生を綴ったもの。

「最小の市民負担で最大の市民福祉」を目標にした都市経営で、ポートアイランド造成、ポートピア'81の開催、中国天津との友好都市提携、神戸ワインの発売など先駆的行政を展開した。

手がけた事業について自ら語る言葉は、神戸を愛する気持ちと市政にかける情熱に満ちている。

新しく入った本

千日の旅―石上玄一郎アンソロジー
荒川洋治編・解説（未知谷）
心のケア―阪神・淡路大震災から東
北へ 加藤寛 最相葉月（講談社）

その日の久坂葉子 柏木薫（編集工房ノア）
五国豊穰兵庫のうまいもん巡り―特産食材&滋味レシピ 白井操監修
手をつなぐ兵庫県産うまいもんネットワーク（神戸新聞総合出版センター）

書庫探訪 その25

『神戸古版画集』

長谷川小信（2代長谷川貞信）は嘉永元年（1840）、大阪に生まれました。父は茶巾襷紗商の三男から志して絵師となった初代貞信で、この父から画技の手ほどきを受け、小信も絵の道に入ります。役者絵を中心とする当時の上方浮世絵界にあって、芝居絵を描く一方で文明開化期の世相や風俗を題材にした多くの作品も残しました。

『神戸古版画集』（昭和11年）は、小信による明治初期の風景版画を集めたものです。神戸港や居留地などを描いた作品には、東西の風俗が混在しています。布引の滝や和田岬の遠景には外国船や幕末の砲台が見えます。画中には外国人とともに市井の人々の姿もあり、小信の精緻な画風は、彼らの目にする日常の景色がまさに変化のさなかにあったのだということを、感じさせてくれます。



摂州神戸布引滝より
海岸を見る図

桃木書院図書館

市立図書館が開設される以前、神戸には私設の図書館がありました。

明治三十五年（一九〇二）、桃木武平が、私財を投じて収集した資料を葺合生田町二丁目の自邸で公開した「桃木書院図書館」です。

桃木武平は、安政五年（一八五八）神戸村（現中央区）に生まれ、八歳の時に母の生家である大松家に養子に入りました。兵庫北濱（現兵庫区東出町）で代々造船業を営んでいた家業を継ぎ、廻船問屋の経営や船舶用材木の売買も行いました。明治二十五〜六年（一八九二〜三）には市会議員を務め、市議会で水道敷設計画が生じた際『神戸市水道敷設方策』を著し、時期尚早論を訴えました。

三十歳余の頃、病弱のため静養を図りながら、国史の研究、なかでも海事の沿革に力を入れて取り組み、古今の資料を収集するようになったようです。

海事資料の収集や造船史研究者として知られた人物ですが、図書館界

にもその足跡が残っています。

京都大学で発足した図書館研究団体「関西文庫協会」の会員であった桃木武平は、明治三十四年（一九〇一）第六回例会で、関西地方の蔵書家が所蔵する図書の見録を作成しようという提案をしています。

また、国立国会図書館所蔵『養老館圖』には桃木武平による由来書が



桃木書院図書館全景

あり、桃木書院所蔵の古図を明治三十九年十月月中旬に帝國図書館（現国立国会図書館）

初代館長の田中稲城の求めに応じて写したとあります。養老館とは岩国藩藩校で、旧岩国藩士であった田中館長は、桃木書院に来館した折、この図を見て「珍しきものなり」と言ったそうです。

明治三十五年（一九〇二）一月二十六日に行われた桃木書院図書館の開館式では、京都大学図書館長の島文次郎をはじめ、招聘された数名の京都大学教授の講演が行われました。

参列者は、約七十名ほどで女性や僧侶の姿も見られたと当時の新聞は報じています。

桃木書院の蔵書は、国史に関する資料を中心としており、約二万五千冊でした。その他の資料として、親交のあった神戸ゆかりの画家である若林秀岳から贈られた開港前の神戸を描いた画帖『神戸覽古』や、武平の求めに応じて秀岳が写した明治初期の町絵図なども蔵書として保存されていました。開館日は土日のみ、手紙による調査相談業務も行っていたようです。

当時の様子が描かれている資料があります。法哲学者の恒藤恭が神戸衛生院に入院していた時期の日記に、桃木書院図書館を訪れるくだりがあり、「四十三四の（中略）背の低い人が帳面に住所姓名を書かせた」「机が高すぎる」など、在りし日の様子を窺うことのできる希少な記述が見られます。

その後、桃木書院図書館は、東出町へ移り、明治四十三年（一九一〇）に閉鎖されました。蔵書の一部と備品は、神戸市立図書館に寄付され、和漢の古典類は京都大学へ寄託されました。

昭和四年三月、台北帝国大学（現

国立台湾大学）図書館が、神戸の古本屋白雲堂を通して桃木書院の蔵書を購入しました。当時の大学の記録では、「桃木文庫五四〇部四八七九冊」となっており、京都大学へ一時寄託されていたものようです。国立台湾大学図書館には日本語古典籍が多く所蔵されており、桃木文庫については鳥居フミ子氏によって詳しく調査され、昭和五十七年に目録が作成されました。

平成二十一年に出版された『国立台湾大学図書館蔵日本文善本解題図録』では、桃木文庫の『古事記』『日本書紀』が図録中「第一の尤品」と紹介されています。

桃木武平は、昭和四年四月、海事史料研究を楽しみに行った台湾で亡くなりました。彼の残したものは、神戸市立図書館の基礎となり、また海外の図書館でも貴重なコレクションとして、大切に保存されています。

参考文献

- 『海事史料叢書』第二十巻（厳松堂書店）
- 『東壁（復刻版）』（学術文献普及会）
- 『大空 神戸衛生院日記』（大阪市立大学 大学史資料室）
- 『在外和書を訪ねて』鳥居フミ子（勉誠出版）

版）ほか